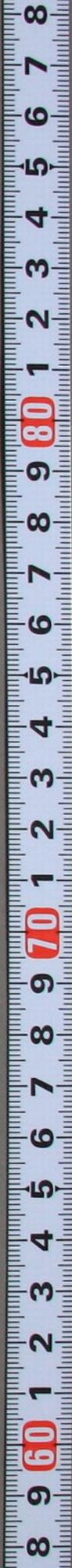




本草綱目

上



千草百子のはねはわき持素色平下  
毛ころしえは長年白々すまふころ  
形勢が志をすくれはてあつらふか海々  
のころあまことかれよかつらのあへり毛  
あつらふころすまふたつらあつらふ  
いしころあつらふあつらふあつらふ  
新来の人乃あつらふあつらふあつらふ











本居乃翁玉の小指手法くつて源氏  
物語註に秋もみきり多る事と  
らくどたもまかひ其いそ緒一と家に  
人々の系圖と志し傳を可也付一攷  
す。おやぐよんはのねまこ品人の  
刃をながきそのたあま海くつて  
あう久は多めてわつた系圖と作  
ゆほく久は多めてわつた系圖と作  
いあははきたあまの志し一がし

多も其いふる暇くも〜いふるいふる  
おのゝこゝろも系臺半休〜舞の所え  
うさあ〜於あつゝあゝあゝあゝあゝあ  
祿〜いふるいふるいふるいふるいふる  
よあ〜いふるいふるいふるいふるいふる  
そあ〜いふるいふるいふるいふるいふる  
あ〜いふるいふるいふるいふるいふる  
月尔日と志路〜集るに年とと合せて  
よあ〜いふるいふるいふるいふるいふる

らあ〜あああああああああああああ  
ああ〜あああああああああああああ  
ああ〜あああああああああああああ  
ああ〜あああああああああああああ

ああ〜あああああああああああああ  
ああ〜あああああああああああああ  
ああ〜あああああああああああああ  
ああ〜あああああああああああああ

北村久備

源氏物語系圖凡例

中より多末ぬる源氏お徳の系系ふれり〜ありと  
同じ〜は今ハ其より〜きに志こがひをやうに改めら  
そまに古き系圖にかりりてい〜ま〜たりり〜れ  
ばあり

○美の名と年号にりて源氏君の齡と年の教より〜  
志りたり源氏君の齡と年教より〜たり〜一〜の中に教  
年と合きたる事〜りきバ支をり〜ん為あり但〜  
白文書より下ハ其君の齡を用也

○中よりの系系と女々婦よても男の末に識〜たり志  
古く系系を志り凡例よ〜りれども〜に役りり〜  
りれハ今ハ其の改書も明ありハ次書のものに志り凡  
を改書より〜記よ〜ハすべて女々〜男の次よ〜ぬ

○皇胤。大臣族卿大夫族系系あり人げ門をて類と  
かひ其申よ各れ前後とましくに始めて中より次第に  
志しうふ又行状ありて名あり系系もあき人の系系  
あき人のまゝしある

○名もあきまら行状もあき人にすまふく且行状  
ありとまら西表の行状まき人く又ハ桐壺乃ま  
の行状まきまきまら女房はあきまらまらまらまら  
まらまらまらまら又まらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

○人くの母と人くの傳ふまらまらまらまらまら  
の傳も系系のあきハ別よハあけまら  
○人くの名の母に母上のまらまらまらまらまら  
人くあり

○かやりの系圖は源氏君と六系院とまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
もあれハ光源氏源氏君とまらまらまらまらまら  
かやりのまらまらまらまらまらまらまら

○人くの傳の中に月日まらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

○人くの傳物傳の傳を書きまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

附ていふ

○此物語の帝乃降名朱雀院冷泉院とハ仙洞まら  
て後降音系とまらまらまらまらまらまらまら

昔有たる天子の御名も色は終り〜けれど今く昔有〜  
て子に唯〜〜〜小い所〜は御徳の祖あり御の帝あり  
ぬハ内又ハ上とのことありせり

○帝を〜〜〜を人〜の名を姓〜〜〜あり先相  
毒の帝〜ハ相毒ま〜にも〜〜ある帝ありは後小御徳と  
よむ人の其帝〜〜の料〜〜に名附〜〜の御徳の  
詞ハ相毒帝〜〜ありハ〜受〜人の名も是〜  
大長も納〜も幾人〜のあり〜は何の大長何大納〜と  
アハ名附〜〜を〜〜らた〜あり

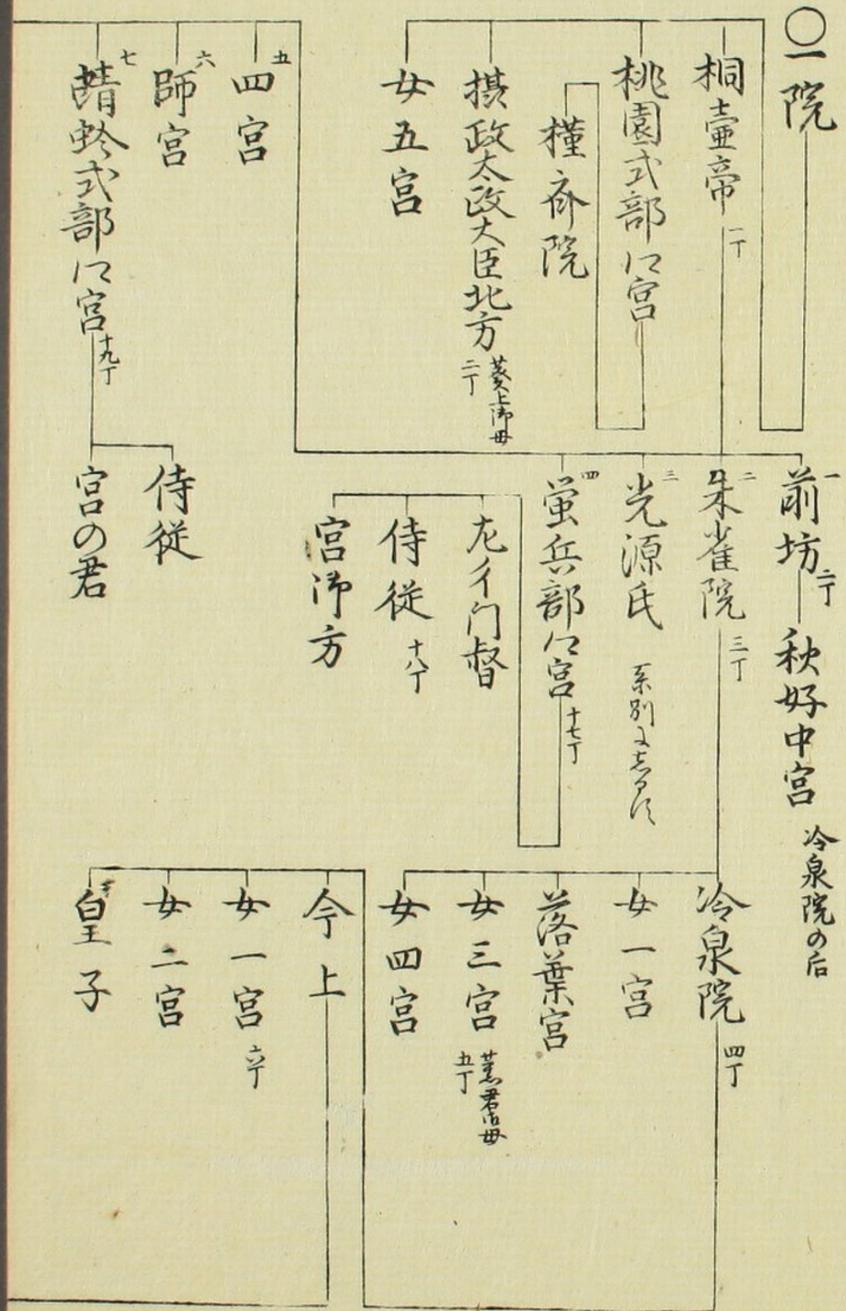
○かく人〜〜〜ハ御徳の御りぬ〜の始〜あり  
おんをた〜名〜御徳〜〜の人の乃〜〜ハ名〜  
つあり御りぬ〜の始〜ありおん〜ハ名ハ光源氏白雲宮  
意大御徳〜と夕殿〜と〜〜人の名附〜ハ秋好申文権

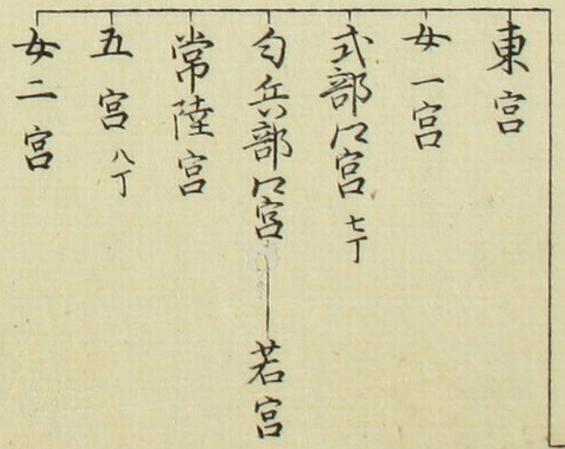
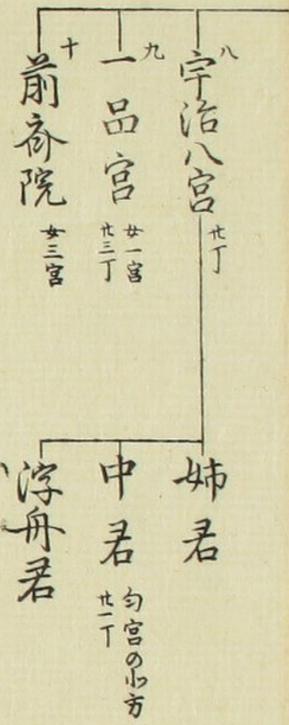
秋院〜〜〜秋好申文と御徳の御り秋の御り  
〜の〜〜秋好〜ハ〜受権の秋院も胡島の姫君〜  
それハ胡島の御を源氏君〜〜〜多〜ハ〜  
胡島の御り〜〜姫君〜ハ〜を〜秋院  
〜あり〜御り〜ハ〜の御り〜  
〜あり〜御り〜

○人〜の名を〜〜ハ〜も亦〜〜あり  
御り〜あり〜ハ〜月秋内御雲井屋〜あり  
〜の御り〜の御り〜ハ〜ハ〜  
〜御り〜御り〜あり〜ハ〜  
竹川た大長御徳た大長夢〜〜  
〜

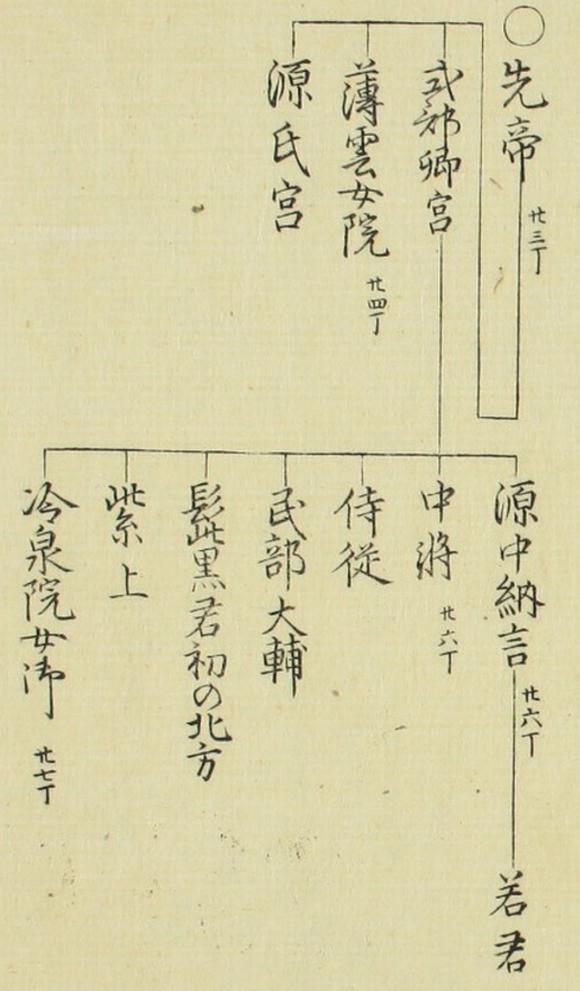
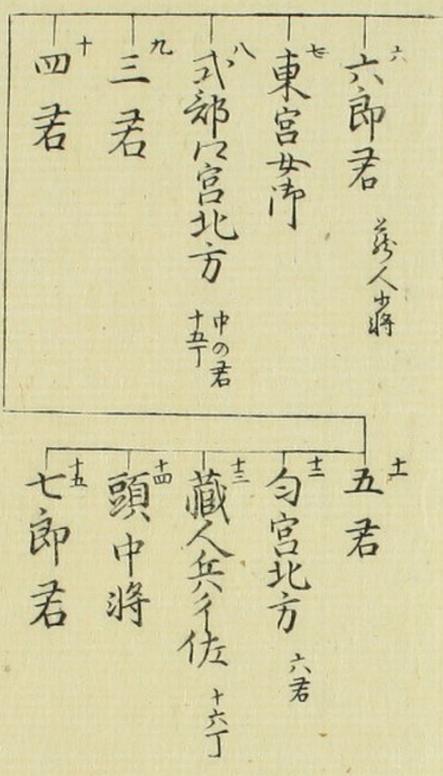
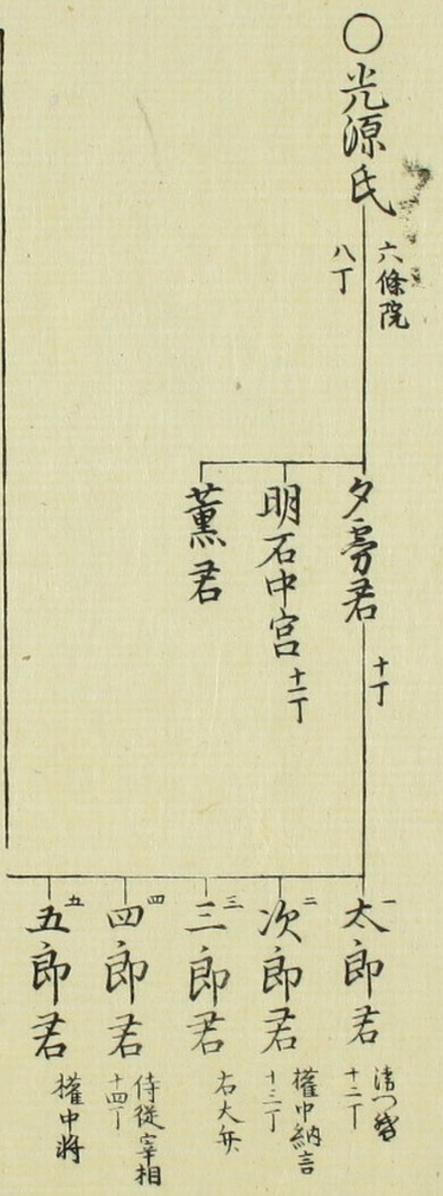
系圖上畧圖

○皇胤





目一



○常陸宮 七十七

禪師君

末摘花君 七十九

○中務宮 七十八

父

明石入道北方 七十九

○大臣族

○攝政太政大臣 左大臣 三十一

致仕太政大臣 頭中將

左中弁 三十一

左門督 後大納言

權中納言 春宮大夫

葵上 三十一

柏木君 左門督

紅梅右大臣 後大納言 三十一

弘徽殿女侍 冷泉院の宮母 三十一

夕旁君北方 雲井君 三十一

鬘黒君北方 玉島君 三十一

近江君 三十一

麗景殿女侍 東宮にあり 三十一

中君 紅梅侍方 三十一

大夫

少納言 三十一

兵手佐 八

後侍從 九

大夫君 十

頭宰相 十一

頭中將 十二

藏人少將 十三

八郎君 三十一

清乙子 五

左門督 十六

藤宰相 十七

○二条太政大臣 四十

大納言

弘徽殿太后 相室帝后 西后

帥宮北方 三十一

致仕太政大臣北方 四の君

五君 五

臈月夜内侍のり 六

頭弁

麗景殿女侍 末葉院女侍

四位少將 三十一

右中弁 八

○右大臣 甲三丁

鬘黒君 甲三丁

真木柱上 甲四丁

兼香殿女侍 朱雀院女侍

後中納言 二

頭中將 甲四丁

次郎君 甲三丁

左兵衛尉 三郎君

冷泉院女侍

右大弁 四郎君 甲六丁

内侍のくみ 中代君

頭中將 六

○大臣 甲七丁

六条清息所

○父 甲七丁

麗景殿女侍 桐壺帝女侍

花散里上

○大臣 甲六丁

明石入道 梅六丁

明石上 甲六丁

按察大納言 甲五丁

雲林院の律師

○父 甲七丁

常陸宮北方 多揚花母

桐壺更衣 源氏君母

大貳の北方

○左大臣 甲七丁

女侍 冷泉院女侍

○左大臣 甲七丁

麗景殿女侍 乙の君 後主女侍 今上女侍 女三女母

大藏卿 甲七丁

修理大夫

○大臣 甲七丁

宇治八宮北方 大君中君母

父 甲三丁 常陸女北方 浮舟君母

左中弁 弁の尼

○竹河左大臣 主下 — 三位中将北方

系圖下畧圖

○卿大夫族

○右ノ門督 辛六丁 — 空蟬君 伊予介の妻

右ノ門佐 小君

○伊豫介 辛五丁 — 河内守 紀伊守

藏人鞞負佐 右近將監

軒端の萩 伊予介の妻 辛六丁

○三位中将 辛六丁 — 夕顔上 玉首君の母 辛六丁

宰相 辛五丁 — 宰相の君

山阿爾梨 辛八丁

○宰相藤原惟光 辛八丁

少将命婦 辛九丁

三河守妻

兵衛尉 辛丁

藤内待のすけ 夕暮君の息人

○尼君

惟光の父のめの中  
辛九丁

僧

○太宰少貳

夕暮上のめの中  
辛九丁

豊後介

夕暮太  
六十丁

揚名介の妻 六十丁

次郎

姉 おのり

三郎

兵部君 らそき

○播磨守

六十丁

源良清

六十丁

五節君

○按察大納言

六十丁

女

紫上の祖母

○父

六十丁

北山僧都

尼君 紫上の祖母

○父

六十丁

少納言君

紫上のめの中

弁

紫上の女房  
六十丁

○兵部大輔

六十丁

大輔命婦

源氏名のめの中

○父

六十丁

和泉前司

中納言君

朧月夜の女房

○太宰大貳

六十丁

筑前守

五節君

源氏君をまひり人

○宮内卿の宰相

六十丁

明石中宮の乳母

○按察大納言

六十丁

五節君

乙女まくにさめ

○常陸介 浮舟君のまゝ父  
六十六丁

一 藏人式部丞  
二 源少納言妻  
三 讚岐守妻  
四 藏人右近將監  
五 小君 六十五丁  
六 左近少將北方

○大將 六十七丁  
左近少將 常陸介のむこ

○父 六十七丁  
女 左近少將の嫁せし人  
妹 六十八丁

○父 六十九丁  
左中弁  
柏木君の乳母  
中納言の乳母 朱雀院の女三女の  
めい

小侍従 女三女の乳母

○父 六十九丁  
一条淨息所 藤原家の内母

大和守  
少將の君 藤原家の女房

○父 七十丁  
大輔の君 宇治中君の女房  
右近 口君の女房

○父 七十丁  
姉  
右近 浮舟君の女房  
七十二丁

○大藏大輔仲信 七十三丁  
大内記道定の妻

○父 七十三丁  
因幡守  
出雲權守時方

○父 七十三丁  
阿爾梨 七十三丁  
浮舟君の乳母 七十三丁  
大とこ

○父  
右馬頭  
蜻蛉式部卿宮の後北方 宮の君のまゝ母

○父 七十三

横川僧都 七十四

尼君 右衛門督の女

常陸介の女

父 紀伊

○衛門の督 小野尼君の夫 七十五

中将北方

○父 七十五

中将 小野尼君の心

禪師の君

○父 七十五

阿闍梨 小野信都の男

少將の尼 小野の尼君の女

系圖 系圖ありて人系ありてくく其まゝの如く抄さるるなり

桐壺 七十六

帚木

空輝 七十七

夕顔 若紫 七十八 末摘花 七十九

紅葉賀 八十

花宴

葵

柳 八十一

花散里 八十二 須磨

明石

湊標 八十三

蓬生

閑屋

繪合

松風 八十四

薄雲

朝白 八十五

とと女

玉葛 八十六

初音 八十七

胡蝶

螢

常夏

篝火 八十八

野分

行幸

藤袴 八十九

真木柱

梅枝

藤裏葉 九十

若葉上

若葉下 九十一

柏木

横笛 九十二

鈴虫

夕霧

御法

幻 九十三

匂宮

紅梅

竹川

橋姫 九十四

椎本

總角 九十五

早蕨

寄生

東屋

九六丁

浮舟

九七丁

蜻蛉

九八丁

手羽白

九九丁

夢浮橋

○皇胤

○一院

紅葉賀巻

保氏君 十九

正月の条より

桐壺帝

桐壺帝即位のより

花宴と夢宴の間 保氏君 廿一 即位を東宮に譲りてありの

させ給ふ 保氏の御よハ

十一月朔日崩

二十一年の条より 十一月の条より

保氏の御よハ桐壺帝といふよりハ又ハ是ハ桐壺帝に  
に之る帝をうけハ保氏の御よハ人乃譲之たり  
ありさせ給ひて保ハ此ノ院との

前坊

秋好中宮の父宮夢孝に故院の清らうらのうらうらと  
あやうらうら

桃園式部内宮

夢孝原氏君 北二 永院の只様の業に或るの事  
夢孝日君 三十二 三月薨

權永院

朝敵の娘君

永院原氏君 十七 原氏君中川の若の四方たうの業式部内宮  
の娘君は朝敵より一氣にをすこし一ちくゆくあて  
かゝるもつゆあけりてこゝろ  
永院日君 廿四 永院永院の腹めくありさそひりねハ  
あつりよあつりよ

朝良日君 三十二

父宮の四肢よりありわさそひ九月桃を  
ふふあつりよ

若菜下日君 廿七

夏の業に四く一あつりあつりよ

権の永院よりハ永院に原氏君より朝敵より多ハ  
一より一永院に永院ハ四く一ありあつりよハ  
朝敵の娘君よりハ井多ひよ一又朝敵に原氏君  
より朝良とわけてあつりよ一権の永院よりハ後  
すりつら原名ありあつりよ又永院ハあつりよ  
永院とつら一又朝良とつら一  
あつりよ一あつりよ一あつりよ一あつりよ一  
あつりよ一あつりよ一あつりよ一あつりよ一

摂政大臣少方

夢上の母宮夕秀君の祖母  
大宮

桐葉に内原氏君 三十二のひつら後よふんか一ねハ  
夢孝原氏君 三十二 夢孝原氏君 三十二 夢孝原氏君 三十二 夢孝原氏君 三十二  
あつりよ

乃孝<sup>三十七</sup> 三月廿日うせり  
夕秀君玉若君祖母の位を  
おわすの事日せし

女五宮

朝良<sup>三十二</sup> 二二 相良<sup>三十三</sup> 二二  
相良<sup>三十三</sup> 二二 國の女に  
きく女との事におはす

藤坊

實に相良帝の侍

藤坊<sup>三十三</sup> 二二 故藤坊の  
相良<sup>三十三</sup> 二二 思ひ  
八月八日藤坊の  
母の事

秋好中宮

冷泉院の中宮 藤好<sup>三十三</sup> 二二  
母の事 藤好<sup>三十三</sup> 二二 母の事

入つて秋好<sup>三十三</sup> 二二 藤好<sup>三十三</sup> 二二  
九月十六日桂川の侍  
藤好<sup>三十三</sup> 二二 母の事

藤好<sup>三十三</sup> 二二 母の事  
藤好<sup>三十三</sup> 二二 母の事  
藤好<sup>三十三</sup> 二二 母の事

藤好<sup>三十三</sup> 二二 母の事  
藤好<sup>三十三</sup> 二二 母の事  
藤好<sup>三十三</sup> 二二 母の事

藤好<sup>三十三</sup> 二二 母の事  
藤好<sup>三十三</sup> 二二 母の事  
藤好<sup>三十三</sup> 二二 母の事

の秋はゆきをよせ多くししも後に若菜上のまうに於ては  
白きあまのりもいと多しきこそ可れしと御侍の御は秋好申交  
とつゆりハスレは是も御侍よむ人の  
御より之を御侍ありし

### 朱雀院

一云 山のまが  
内母弘徽皇后大后二条太政大臣女

桐葉書<sup>三</sup>五坊

口書に一のこ右大臣の御侍の御後とて口書にありし  
乃去あまのり多しき御侍成天日集のまありし

花葉書と葵書との間は五位

御侍の御は御侍よむ人の  
葵書よむ御侍ありし

淡標書<sup>七</sup>九

二月廿余日御譲位

若菜上書<sup>三</sup>十九

十二月廿二日法皇御志の後二日してゆく

かろしゆ

同書<sup>四</sup>十

二月西山の御侍に移り住まふ山のまとてゆく

若菜下書<sup>四</sup>十七

十二月廿六日御侍成天日集の御志とてゆく

按朱雀院とては御侍とてはひて後の御侍成天日集とては  
たろとてゆく御志朱雀院とては

### 冷泉院

内母善女院先帝御侍女  
美い桐葉書<sup>三</sup>十自皇子 桂所書云は院の事八十の  
こと多しき御志ありし

紅葉書<sup>三</sup>十九

二月十余日御譲位

花葉書と葵書との間は五位

五坊の御は御志とては御志とては  
に御志とては御志とては

淡標書<sup>六</sup>九

二月廿二日御侍成天日集の御志とては

新書<sup>三</sup>十六

十二月大原御侍成天日集

若菜下書<sup>四</sup>十七

十二月廿六日御侍成天日集の御志とては

按朱雀院とては御志とては御志とては  
御志とては御志とては

### 今上

内母兼善皇后御侍成天日集

冷泉院の御志とては御志とては御志とては

女一云

若菜上より女をたぢりて入らむるに

唐紫宮

神木村大綱云の少方 一条の事也  
神母一条の神息所 神母の事也

若菜下より 四十七 若菜上より 四十八 若菜中より 四十九

若菜上より 四十九 若菜中より 五十 若菜下より 五十一

若菜中より 五十 若菜下より 五十一 若菜上より 五十二

若菜下より 五十二

若菜上より 五十三 若菜中より 五十四 若菜下より 五十五

若菜中より 五十五 若菜下より 五十六 若菜上より 五十七

若菜下より 五十七 若菜上より 五十八 若菜中より 五十九

若菜上より

按若菜下より神木君の女をたぢりて入らむるに  
若菜上より神木君の女をたぢりて入らむるに

ひたしおこしむるにきりきりしめれどもしつては少くも  
つらつら細流をくぐりて但しお流の淵に若菜の上より

女二云

二条の事 阿多事 入夜の事  
神母一条の神息所の事

若菜上より 二十九 若菜中より 三十 若菜下より 三十一

若菜下より 三十一 若菜上より 三十二 若菜中より 三十三

若菜中より 三十三 若菜下より 三十四 若菜上より 三十五

若菜上より 三十五 若菜中より 三十六 若菜下より 三十七

若菜下より 三十七 若菜上より 三十八 若菜中より 三十九

若菜中より 三十九

若菜上より 四十 若菜中より 四十一 若菜下より 四十二

若菜下より 四十二 若菜上より 四十三 若菜中より 四十四

若菜中より 四十四 若菜下より 四十五 若菜上より 四十六

若菜上より 四十六 若菜中より 四十七 若菜下より 四十八

若菜下より 四十八 若菜上より 四十九 若菜中より 五十

若菜中より 五十 若菜下より 五十一 若菜上より 五十二

若菜上より 五十二 若菜中より 五十三 若菜下より 五十四

若菜下より 五十四 若菜上より 五十五 若菜中より 五十六

若菜中より 五十六 若菜下より 五十七 若菜上より 五十八

若菜上より 五十八 若菜中より 五十九 若菜下より 六十

早蕨廿五 二月廿五のちとん 三条糸小福り廿八  
り廿九

女曰文

若菜上廿八 小い女おたらあ入廿九 おい三十 ま三十一 ち三十二

今と

母兼善女侍兼善右大臣兼善  
実八兼善院の白子

明石廿八 兼善の糸に廿九 小南代三十 小右大臣の三十一 心三十二

兼善殿の女侍乃廿九 小腹三十 小男三十一 小ま三十二 小あ三十三 小い三十四

ハ三十五

遷標廿九 二月廿五日三十 坊三十一

梅枝廿九 二月廿五日三十 侍三十一 文三十二 殿三十三

若菜下廿九 侍三十 位三十一

宣廿九 兼善と法抄に今と三十 兼善の心三十一 兼善の心三十二 兼善の心三十三 兼善の心三十四 兼善の心三十五

女一文

母弘徽殿女侍致仕太政大臣女

白廿九 兼善の心三十 兼善の心三十一 兼善の心三十二 兼善の心三十三 兼善の心三十四 兼善の心三十五

白廿九 兼善の心三十 兼善の心三十一 兼善の心三十二 兼善の心三十三 兼善の心三十四 兼善の心三十五

女二文

母兼善右大臣女

竹川廿七 四月廿八 生廿九 れ三十 ろ三十一

曾子

母右大臣

竹川廿七 兼善の心廿八 兼善の心廿九 兼善の心三十 兼善の心三十一 兼善の心三十二 兼善の心三十三 兼善の心三十四 兼善の心三十五

兼善の心三十一 兼善の心三十二 兼善の心三十三 兼善の心三十四 兼善の心三十五

東宮

母母明石中兼善氏若菜女

若菜上廿八 三月十日廿九 階三十 徳三十一

若菜下巻 四十六 東京小たてのり

女一文 二の文 沖母末巻小同

若菜下巻に... 女一文の...  
今扱は文を... 沖母末巻小同

今扱は文を... 沖母末巻小同

白文... 女一文...  
沖母末巻小同

沖母末巻小同

浮舟... 二の文

浮舟... 二の文

式部... 二の文 沖母末巻小同

若菜下巻... 二の文

白文... 二の文

晴珍... 二の文

白文... 二の文

若菜下巻... 二の文

白文... 二の文

白文... 二の文

権守孝 廿二 二月廿日 神楽詣

徳蘭孝 廿四 八月廿六日 宇治の中君小名通御多小

早共殿孝 廿五 二月七日 中君と二条御小ひくうり多小

寄生孝 廿五 八月十六日 夕暮君の六君においしむ

按 白家まふ小依の世くはありふまむ  
くわちやわとまむくひつげくま

若宮

清母中君之孫八三所女

寄生孝 廿五 二月二日 生れ多小

常陸宮

四の文  
清母更衣

白文孝 廿五 正月夕暮君六条御中 賭弓のうり多小

中下ふふ心のこ 常陸の文と御由る 更衣後の八思ひ多小

あつけいこふありおしり多小 大ね夕暮君より多小

まねくまひくうりの文信もられふのこやとひくう車よ

すひきののたまりてまうて多小

寄生孝 廿六 三月晦日 今上の後立の夜まらふふり多小

うらハこの文 白文 ひたらち乃ふなとくさくひ多小

五宮

清母更衣に口

白文孝 廿七 本文章

按 寄生孝に中務まてくたたらはけまあつて 寄生孝にいたた  
つま殿上に泣くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
源のちん人ゆふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
ゆふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
まつらまつくれ  
考くくくく

女二宮

後立の文  
清母後立女清大長所女

寄生孝 廿四 夏清母女清うせり小今年女二の文四年

十四

口孝 廿六 二月廿余日 西のき又の目蓋君とありとあり多小

四月三条乃文小ありとあり

光源氏

二条院 源氏の甲子 宇治の君 大納言 大納言  
内大臣 大納言 大納言  
源氏 大納言 大納言 大納言

桐志重三十一歳小生れり

門者三歳着袴門一年夏津母更衣せり

門者七歳四ふと初て後帝けしこを源氏小生れりくおきてり

年五十六歳

門者十二歳之被之取引入の大位の手退おた大位の内女葵

上十四歳いひかへに集りりしは二条院を造り

桐志重十二歳と常木十二歳の間十二歳物行なり一年も洋なり 申す小生れり

常木生れりし中おるなり

和歌十六歳十月十余日正三位十六歳なり

門者十九歳七月宰相お小生れり中おるなり

花宴十八歳夢の洞廿二歳大将小生れり夢をたてし大納言の君なり

あ人もはさしむわされてま

次子廿六歳二月末つと次子なり

明石廿七歳二月十二日明石の入り夏の手小なり 和歌なり

して明石の歌も揚り

門者廿八歳七月廿五日官旨下りて西御路二条院に入り

正位なりたまりて権大納言なり

遷標廿九歳二月内大臣なりしは二条院の東院を造

らる秋任を造

園屋廿九歳九月晦日石山詣

鎌倉三十歳春晴儀の御堂を造り

和風三十歳二条院の東院造りて花散里上を造り

なり

藤原三十二歳秋を政大臣に成りしはきりて定むるなり

望く輝しきふされと即位すひて牛車と稱されて御  
に出入りし

とてあまき 三十三歳 を改大后あけりし

日き 三十四歳 秋に東宮を造りし

日き 三十五歳 八月に東宮を造りてついでにあはれ  
を福しきし

敬事深き 三十九歳 秋に上天皇に推して西村よりし

若菜上き 四十歳 四十の西宮あり

若菜下き 四十歳 十月中の十有日若菜上と侍  
ひし

ひき 五十二歳 八月十四日皇上下せりし

幻き 五十二歳 冬に東宮にありし世とてあはれし  
とてあまき 五十二歳 との同八歳に西宮にありし

白き 五十二歳 のとめらふひり隠れし

つぎ 五十二歳 のとめらふひり隠れし

昇生 五十二歳 のとめらふひり隠れし

とりの 五十二歳 のとめらふひり隠れし

さの 五十二歳 のとめらふひり隠れし

按桐書に世の人皇とて西宮にありし  
とてあまき 五十二歳 との同八歳に西宮にありし  
にさしはるるに西宮にありし  
とてあまき 五十二歳 との同八歳に西宮にありし  
かきく白き 五十二歳 のとめらふひり隠れし

夕秀なま

大子の君 侍役中お事お中將 権中納言大右左大臣  
西母 葵上攝政右大臣西母

葵 五十二歳 秋に西宮ありし

葵標 五十二歳 内東宮の殿上ありし

しきふ

夏元後清苦めて庭上よりやうて二条の  
東院よりあきふ附大寺子寮に入りふき年十月のまじりつて  
並夜ふくまゆりゆらばゆりて桑のあきく後花散里  
の上にあつけけりしる又のまじりつて

二月廿五日 藤原院の御日かきりしる  
多ひて進士ふぬきき年終の御日に侍候ふ

秋のあきに中納言の君とて  
玉鬘曼事 秋のあきに中納言の君とて  
多ひて進士ふぬきき年終の御日に侍候ふ

秋のあきに中納言の君とて  
玉鬘曼事 秋のあきに中納言の君とて  
多ひて進士ふぬきき年終の御日に侍候ふ

秋のあきに中納言の君とて  
玉鬘曼事 秋のあきに中納言の君とて  
多ひて進士ふぬきき年終の御日に侍候ふ

十二月のあき二十もききりある  
若菜上まき 十二月のあき二十もききりある

明石中宮

西の侍と相違のりく 二条の女侍  
仲母明石上入道茶揚座を女

凌標保氏若 三月十六日明石中しれぬ

松尾口若 秋明名上 母上具一糸一せて入洛大舟の

家二位口若 二月二條院よりむらひ母上とまひひもあつて

梅枝口若 二月四堂者

後重口若 四月廿五日

若菜口若 二月十五日

出法口若 二月十五日

白文口若 冷泉院

柏本口若 二月

又秋の条より右連申ぬ

三月

二月

二月

薰右大将

源氏後 四位の信俊 源中好 兼中好 源中細

梅枝口若 二月四堂者  
後重口若 四月廿五日  
若菜口若 二月十五日  
出法口若 二月十五日  
白文口若 冷泉院  
柏本口若 二月

白文口若 冷泉院

冷泉院

又秋の条より右連申ぬ

三月

二月

うーい

寄生書 11年 九月廿一日定路おどり多しお公家の孫殿と  
山寺に梅して浄堂造るものと投り

11年 二月廿日辰大納言成右左衛門をひまふ口

一月廿一日今日よの女二と流すりまふ

東屋書 11年 定路の浄堂造りておぬらうい

梅白あまきりに上例の世人あまきりおぬらう中おしつらうい  
つげくまこ又いよのわらうまそせの白ひをけは中まらうい  
おらういひまらういわらうい満たわらの遊風もまらうい下地の外  
うらういまらういまらうい竹川まらうい源信長とていこい  
いあういまらういまらういおぬらういあうい

左衛門

在馬侍 母二系上 聖年 紋仕太政大臣女

父方書にいふ 按御前系系に左衛門に傳授とてうらたもあられ  
又いお白あまきりの梅まらういて是まの  
おぬらういをいあけるあうい

若菜下書 11年 正月廿日余自兼雀院今山愛の武楽の日

乃系云たたおの山を高横笛吹てすのふふふふ

あふふ又十二月同日一試案に為時音ううい

白あまきり 21年 父方書 賭うのうううい

院おてあふふ系にいふ 父方書 山子のあつて中納言

右大兼おとさうぬ上達部れ是あまきりいさあひ

たて 乃系流しおぬらうい

絶角書 11年 十月廿日白あまきりおぬらうい

い系うらふ事相ひは乃傳つてい

ねくうらういいさあひてあまきり

次所若

権中納言 母後典侍系後推老女

夕方書にいふ 按御前納言といふは源高若と  
いふはうらういあふい

門まゝ山いふこの君は高君はひんく〜の町〜上尾道里小まなり  
つきて〜つき〜まなり〜  
内膳のつたり〜君とせしち  
ひ〜つ〜  
若菜下ま保元元年  
四十七十二月兼在院のま十の夜の試樂〜白

藤原平治のま〜  
白ま廿二正月賭弓のつ〜  
和文書

三帝君

右大弁  
西母三条上

夕秀書廿二 抄若菜下ま  
四十七 十二月兼在院のま十の夜の試樂〜白

若菜下ま保元元年  
四十七 十二月兼在院のま十の夜の試樂〜白

歳末舞のま〜

白ま廿二 正月賭弓のつ〜

権中書廿二 二月廿日 祝白ま廿二 初詣のま廿二

夕秀君 四子の二君右大弁侍従の宰相権中將は人  
の  
玄勝依中と望あり〜

四帝君

侍従の宰相  
西母三条上

夕秀書廿二

抄若菜下ま  
四十七 十二月兼在院のま十の夜の試樂〜白

権中書廿二

二月廿日 祝白ま廿二 初詣のま廿二

五帝君

権中ね  
西母兼内侍の子

夕秀書廿二

抄若菜下ま  
四十七 十二月兼在院のま十の夜の試樂〜白

権中書廿二

二月廿日 祝白ま廿二 初詣のま廿二

寄書廿五

八月十六日 白ま廿二 初詣のま廿二

父か〜のま〜のま〜  
父か〜のま〜のま〜  
父か〜のま〜のま〜

は君也

六節君

君人の名は將 三位中納言 幸成守

夕芳君に

按 夕芳君はよふふの弟を以て たるは

竹川君云々 君人の名はとふひー三條殿の四振也 是君

推甲君

推甲君はよふふの弟を以て たるは

竹川君

竹川君はよふふの弟を以て たるは

督志の山

督志の山はよふふの弟を以て たるは

東文の女

大服君 女

夕芳君に

東文の女はよふふの弟を以て たるは

白文君に今上の 大姫君は東文今上の ともありまひて又き

式部は宮の女

中の君 母二条上

夕芳君に

白文君に

今上の二条上 式部は

と時々の世に今上の 女もあひて右のお母中の君

三の君

母二条上

夕芳君に今上の 二の君は次女君もひん花散里上

四の君

母二条上

夕芳君に今上の 三の君は次女君もひん花散里上

夕音まきよのち

みの君

内母二条上

夕音まきよのち

白無邪に宮の小方

六の君  
内母内侍す

夕音まきよのち

白無邪に一条文高貴 甚いふふうのち

舞生まきよのち  
文のちとよふ

母のちのちとよふ  
夕音まきよのち

総角まき 廿四 秋の糸うつふたのお母いぬのちとよふ

けつれおちたらしあねと水くさちくまのち

おふくふた定めらるる

早蕨まき 廿五 二月廿五日菅原君

寄書まき 廿六 八月十六日白無邪に宮のちとよふ

二之 廿七 八月廿六日白無邪に宮のちとよふ

あはれと男かまを二人服を着て二人夕音のまにたがふふとち  
ふに末のまきよふとくたつたりとちの子をたとれい合せ九人たり  
はくふ二人夕音まきよのちの年にせれふふとちかふ竹川まきよ  
廿月夕音まきのちとちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
なすつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
おふくふた定めらるる

花入まき

権がまき 廿八 二月廿八日の白無邪に宮のちとよふ

四子の君連在太舟竹根の章お権申お辰が将兵人のまきよ  
あはれと男かまを二人服を着て二人夕音のまにたがふふとち

竹川まきよは長門の姫君冷泉院へ入内のおふくふたとち  
くふとちまきよのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
佐ふくまきよのち





お梅さまも申さね小父さうせおひー花柱後母上上よりして

梅原大納言後小お梅  
右大臣の御許小すゝまひてまのけし又おの御名

申由白き娘はまぢかしく見ゆひー人

寄書まゝおひ白まの何こあつぬおぬハ梅原の大納言の

こころのうごもつねおぢーたんけ

曰ま

は母兼書殿女中  
お受遣

おまかさま係女中  
十八十月十日自來権院へおまのあより

兼書殿のほごの心のこころまめて秋風おんあま

かんきーつきのんおのころさ

御ま

おまごに花散里の上う海氏君にまをぶらひまのけし

のこまおのまぬ女おひーまごのころへまごのあま

はまひかゝるおお君のらゝ花まごのあま

梅原兼書殿(右大臣)の御名を御下  
かへし一まごの御名を御下

晴鈴お初はま

東屋平にむすめのおすと兼書おひのあま

晴鈴さま兼書  
十七二内のおまごのころお初はまごのあま

おひーおぬハ兼書おまごのあまおひーおまごのあま

うちれまごおひーおまごのあま

梅原兼書お初はまごのあま  
多しお初はまごのあま

侍従

は母いえのお方

お初はま

は母いえのり

晴鈴さまお初はまごのあまお初はまごのあまお初はまごのあま





寄生書 己酉年 正月 女月 とうり 情 姫さ

門書 己酉年 二月 二日 若君を産みし

按流布の基家に友はとうり中の若君に小かの中の時よと  
こ由如流の初小にこ

浮舟君

西の  
四母中若君友は方の田後幸隆介の事

寄生書 己酉年 九月 女より白く信をきめて毎の足の手書  
福ふらぬ友に信のさから信信しとる故のたはせ  
あつける神也つりける信の君とてはひさよとら  
をさそふしとらしつり信とらるる神のひてとら  
き神の信のさから信のさから信のさから信のさから  
あつる信のさから信のさから信のさから信のさから  
小ららるる信のさから信のさから信のさから信のさから  
おやつりてはさつたのひの信のさから信のさから信のさから

ちたかふのひてとらるる信のさから信のさから信のさから  
のさから信のさから信のさから信のさから信のさから  
ひらふおつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり  
らららららららららららららららららららららららららららららら  
す申あつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり  
かたき信のさから信のさから信のさから信のさから信のさから  
うしつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり  
のさから信のさから信のさから信のさから信のさから信のさから  
信のさから信のさから信のさから信のさから信のさから信のさから  
君へのつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

按寄生書に中若の若君ふらるる信のさから信のさから信のさから  
つりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり  
のさから信のさから信のさから信のさから信のさから信のさから  
つりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

己酉年 己酉年 己酉年 己酉年 己酉年 己酉年 己酉年 己酉年  
己酉年 己酉年 己酉年 己酉年 己酉年 己酉年 己酉年 己酉年  
己酉年 己酉年 己酉年 己酉年 己酉年 己酉年 己酉年 己酉年  
己酉年 己酉年 己酉年 己酉年 己酉年 己酉年 己酉年 己酉年

拙は文のつきたは舟君は三月も初瀬ふりてまひらう  
又さう

舟君 口年 八月舟君は舟君殿に遊ばせ入るに  
お侍に常侍のまこととて呼ばれたるは娘山がらひ  
そむ母う(又舟君を中の子小して志すして二条院へ移  
す) は舟君の相成り入るの公事の時よりして 是時舟君は舟君  
對面し舟君の母うは舟君を志すして舟君の母に移り九月十日  
薨君二条の東においで舟君舟君小を初めひ又の日々  
のまに移り舟君  
舟君 口年 正月舟君は舟君殿に遊ばせ入るに  
移り舟君 口年 二月舟君は舟君殿に遊ばせ入るに  
舟君 口年 小舟君舟君殿に遊ばせ入るに  
舟君 口年 舟君舟君殿に遊ばせ入るに  
舟君 口年 舟君舟君殿に遊ばせ入るに  
舟君 口年 舟君舟君殿に遊ばせ入るに

冷泉院

舟君殿の東に舟君舟君殿に遊ばせ入るに  
舟君 口年 舟君舟君殿に遊ばせ入るに  
舟君 口年 舟君舟君殿に遊ばせ入るに

不宮

舟君殿の東に舟君舟君殿に遊ばせ入るに  
舟君 口年 舟君舟君殿に遊ばせ入るに  
舟君 口年 舟君舟君殿に遊ばせ入るに

舟院

舟君殿の東に舟君舟君殿に遊ばせ入るに  
舟君 口年 舟君舟君殿に遊ばせ入るに

花宴亭小女の日記

夢見 十二 月一日の夜 夢見もあつて 辰後の女と交りぬ

柳 廿四 其の夜より 柳の枝にて 相毒亭前 ありあり

一月六日 朝の曙 若くして 井の邊にて

○先帝

相毒亭の日記 何れの手紙に 相毒亭の日記

式部公宮

相毒亭の日記 大正 相毒亭の日記 大正

相毒亭の日記 四月の日記に あり

毒雲女院

相毒亭の日記 四月の日記に あり

七月 中 日記

柳 廿四 十一月 相毒亭 日記 あり



源中納言

九を清書

後橋君 源氏君 三十七より或部は亥の九を清書ハとの上 是と云ふ  
 らうらそか まがねに又又 君小をを おとらけの  
 梅枝のき小 おとらけの 入内 おとらけの  
 うせり おとらけの 君さく おとらけの  
 宰相中納言 おとらけの 或ア おとらけの 亥の九を清書 おとらけの  
 赤に おとらけの 亥の九を清書 おとらけの

若菜下 おとらけの 小源中納言 おとらけの

若君

若菜下 源氏君 四十七 土月 舞雀院 浄加笑の 武樂の 糸よ 或部ハ  
 亥の九を清書 おとらけの 今ハ 源中納言 おとらけの 亥の九を清書 おとらけの  
 あひ おとらけの

中將

侍従

氏部左補

志本 おとらけの 小整 おとらけの 亥の九を清書 おとらけの 亥の九を清書 おとらけの  
 亥の九を清書 おとらけの 亥の九を清書 おとらけの 亥の九を清書 おとらけの  
 亥の九を清書 おとらけの 亥の九を清書 おとらけの 亥の九を清書 おとらけの  
 亥の九を清書 おとらけの 亥の九を清書 おとらけの 亥の九を清書 おとらけの

源氏君

母今ののち方 源氏君

源氏君 源氏君 三十七より小 源氏君 亥の九を清書 源氏君  
 亥の九を清書 源氏君 亥の九を清書 源氏君 亥の九を清書 源氏君  
 亥の九を清書 源氏君 亥の九を清書 源氏君 亥の九を清書 源氏君  
 亥の九を清書 源氏君 亥の九を清書 源氏君 亥の九を清書 源氏君

格ねまきりしきむね忠君の由喜の君よりおとけりしおの  
けふ好いままのその御もあつらひけるも大なる  
りの成りけむいしりしきむね忠君の君よりおとけりしおの  
むくしりしきむね忠君の君よりおとけりしおの

け系上

保氏君少方 二条の君 喜の君の  
母故按察大酒言女

若君若君 十八 三月保氏君よりおとけりしおの  
の保氏の坊よりいせし時より祖母の尼君  
て尼君の坊よりいせし時より祖母の尼君  
の坊より尼君よりいせし時より祖母の尼君  
よりいせし時より祖母の尼君  
よりいせし時より祖母の尼君

しめきりしきむね忠君の君よりおとけりしおの  
むね忠君の君よりおとけりしおの  
四月廿五日若君入内の御送り小系より  
まひ登車ゆりこれてまうてまふ  
若君若君 十八 夏やおいしりしおの  
之二十七日小系退りたる  
りのおとけりしおの

按末掃菟まきりしおの  
も斯君の坊よりいせし時より祖母の尼君  
よりいせし時より祖母の尼君

冷泉院の女清

中の君

渡標まきりしおの  
しめきりしきむね忠君の君よりおとけりしおの

とてめき 臣氏君 夏の業よりふき初めのまをさへし今ハ武初  
はまてけ 臣氏君 してやむとてあまはさへてふにすむすめ  
ほいりて 臣氏君 ちく 臣氏君 あま 臣氏君 王女降 臣氏君 ちく 臣氏君  
多とま

○常陸宮

臣氏君 ちく 臣氏君

末摘花 臣氏君 小友常陸のこころ

禪師君

臣氏君 ちく 臣氏君

蒼生 臣氏君 ちく 臣氏君 禪師の君とて

初 臣氏君 ちく 臣氏君 たつこのちく 臣氏君 けい 臣氏君 けい 臣氏君 けい 臣氏君

きぬ 臣氏君 ちく 臣氏君 ひ 臣氏君 ちく 臣氏君 ちく 臣氏君 ちく 臣氏君

さむ 臣氏君 ちく 臣氏君 ちく 臣氏君 ちく 臣氏君 ちく 臣氏君

臣氏君 ちく 臣氏君 ちく 臣氏君 ちく 臣氏君 ちく 臣氏君

末摘花君

臣氏君 ちく 臣氏君

末摘花 臣氏君 ちく 臣氏君 ちく 臣氏君 ちく 臣氏君

たると 臣氏君 ちく 臣氏君 ちく 臣氏君 ちく 臣氏君

まひ 臣氏君 ちく 臣氏君 ちく 臣氏君 ちく 臣氏君

臣氏君 ちく 臣氏君 ちく 臣氏君 ちく 臣氏君 ちく 臣氏君

若菜を煮にほよ東の流より小町へ福へゆきゆき

按よ若菜の茹居と流布の茶居よこ西若菜の幸にほ若菜の身をく  
く若菜の茹居よ未播花より未播花に刻川りきき若菜も  
あよ小町よこのまつむ花と袖よ小町よはかにして其の若菜も若菜の若菜  
よもあせせささささささささささささささささささささささささささささ  
ささささささささささささささささささささささささささささささささ  
ささささささささささささささささささささささささささささささささ

日又流よか

○中勢のま

松風まにりふひり　上松風まよ若菜のほねちち中勢まよゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

父

指よとあ

按小氏放を備してひりりよ松風まよ中勢まのほねの若菜よゆきゆきの  
まよゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
若菜放のま備の若菜よゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

「入乃播磨言小方

明石上の母尾若

松風まよ小町石の上小具よゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
若菜上ま你氏若尾若とよ二十めまき後小若菜

○大臣族

○攝政を改る

引継ぎの事

たまた 改任の事

源氏右の事  
夕芳君の外祖父

相承る源氏君 十二元孫の末より引継ぎの事

柿

十五

其の末よりたのめりし事やけれりた

たの世の有りき事よりのうくおるして改任の事ありき  
とさなひくしちひきせたりし事ありき  
てこのりおひぬき

源氏君 二月冷泉院即位して後を改る

攝政の事ありき

源氏君 三十二

致仕を改る

是の事 致仕の事ありき 中納言 大納言 改任の事ありき 三宗の事

母相承る事ありき

相毒をふしは子とあまこころにのしめあまのほをら  
いづれ人のおぼめてしとあまのきと右のおしめの中  
いづれ福とえさうくしめくしめくしめくしめくしめ  
了邊せきりおとくはてしつきたるいづれまわ  
きいれいといふおん  
帯束を小政中ねとて也

紅葉かたき 源氏 十八 十月十餘日奉花院一のきの夜西の位下  
小政中

葵を 口君 廿二 二之位中ねとて申  
須磨を 口君 廿七 五の条にしふ大叙の二位中ねいと々事お  
小あつて 口君 廿九 申ねえの

渡標を 口君 廿九 二月の条にしふ事おね格中納 口君 廿九  
海雲を 口君 廿二 秋の条に大納をめて右大ねくけり 口君 廿二

ととあま 口君 廿二 よしお大ね内大臣 口君 廿二 ひね世中 口君 廿二 の 口君 廿二  
いづれ 口君 廿二 君 口君 廿二 ゆつ 口君 廿二 せ 口君 廿二 ぬ 口君 廿二

後束 口君 廿九 秋を政大臣 口君 廿九  
若菜 口君 廿九 よし 口君 廿九 あ 口君 廿九 む 口君 廿九 け 口君 廿九 の 口君 廿九 葉 口君 廿九 あり 口君 廿九  
わ 口君 廿九 ひ 口君 廿九 ぬ 口君 廿九 け 口君 廿九 の 口君 廿九 葉 口君 廿九 あり 口君 廿九

白 口君 廿九 の 口君 廿九 葉 口君 廿九 に 口君 廿九 政 口君 廿九 小 口君 廿九 政 口君 廿九 中 口君 廿九 ね 口君 廿九 と 口君 廿九 て 口君 廿九 申 口君 廿九 ね 口君 廿九 と 口君 廿九 申 口君 廿九 ね 口君 廿九  
に 口君 廿九 申 口君 廿九 ね 口君 廿九 と 口君 廿九 申 口君 廿九 ね 口君 廿九 と 口君 廿九 申 口君 廿九 ね 口君 廿九

た申毎

若菜 口君 十八 三月 口君 十八 源氏 口君 十八 若菜 口君 十八 の 口君 十八 葉 口君 十八 の 口君 十八 葉 口君 十八 の 口君 十八 葉 口君 十八  
白 口君 十八 の 口君 十八 葉 口君 十八 に 口君 十八 政 口君 十八 小 口君 十八 政 口君 十八 中 口君 十八 ね 口君 十八 と 口君 十八 て 口君 十八 申 口君 十八 ね 口君 十八 と 口君 十八 申 口君 十八 ね 口君 十八  
た申 口君 十八 毎 口君 十八 の 口君 十八 葉 口君 十八



ともあま 三十三 八月の内大敵 敵は昔の君をたのふり納さるる  
 依竹後美あまのりよとてあまのちとあまのつひたれとて  
 於嫌き 三十四 乙申のちとて 中ねりよとて 乙申のちとて  
 乙申のちとて 乙申のちとて 乙申のちとて  
 乙申のちとて 乙申のちとて 乙申のちとて

薄大者 秋 乙申のちとて

若菜上 三十五 乙申のちとて 乙申のちとて

若菜下 三十六 乙申のちとて 乙申のちとて

乙申のちとて 乙申のちとて 乙申のちとて

柏木 三十七 乙申のちとて 乙申のちとて

柏木は本居くは六柏本まにうせりあゆまあつーのまをらけおとつあし  
 故標まには足居のあつとつ若小かろけあまのまに別あとも若ハ  
 まろくあまのちとてあまのちとてあまのちとてあまのちとてあまのちとて  
 の酒小のちとてあまのちとてあまのちとてあまのちとてあまのちとて

毎のちとて 毎のちとて 毎のちとて

印梅右大臣

母 柏木君小因

柳 三十八 乙申のちとて 乙申のちとて

乙申のちとて 乙申のちとて 乙申のちとて

あし 車 取くの方小のせき 松 又多ひりりき 柏木そに柏木

や木葉もした大冬の前とて物 終末き八月十六夜 冷泉池 一葉り 一葉り

もた大冬とあり夕音き小冬の前とありて 終末きよむけ 一葉り 一葉り

終末きに大冬とてむるも 遊月抄にあり松君のうりり

○年 志れ 大綱をよ 竹川孝 廿六の 松君十五六の 松の事

白官の地味法の家につくむらふ 大綱をたつこと 一ひり 一ひり 松君

後大綱をよ 竹川孝 廿六の 松君十五六の 松の事

竹川孝 廿六の 松君十五六の 松の事

○年 志れ 大綱をよ 竹川孝 廿六の 松君十五六の 松の事

寄生き 廿六の 二月 松君十五六の 松の事



て凡の白りけ屋の敷ふりつきのしんてやましくんてのまゝに  
ふくまひりやりのしんてやましくんて

正上

大文

母松柱上候悪右大臣女  
お初めとふりておにん

弘徽殿女侍

冷泉院廿二文の母 廿一文の女侍  
母御本君小侍

徳標孝<sup>保氏君 廿九</sup> 二月辛卯お仲ね<sup>被仕人信</sup> 松中納言よりおひりの

四君の山をらの姫君十二はあま<sup>と</sup>内よあま<sup>と</sup>せん<sup>と</sup>つこ  
おひりの一<sup>一</sup>年八月内あまよりおひ弘徽殿の女侍とす也

繪合孝<sup>保氏君 三十一</sup> 三月絵合のしり右方へ

竹川孝<sup>保氏君</sup>に廿一文の女侍とす也

夕尊大長の方

聖の宿 三束の上 二束の方  
母今の様松太文細の方

とくの孝<sup>保氏君 三十三</sup>よりお女侍と今二束とあはるに<sup>さ</sup>よりいんと

ありいらめてあてあすちのけさるまう<sup>お</sup>れと母君松  
泉の大細の方<sup>は</sup>女<sup>侍</sup>と<sup>い</sup>ひ<sup>た</sup>るまの<sup>お</sup>は  
く<sup>お</sup>て<sup>ま</sup>ね<sup>ま</sup>う<sup>は</sup>な<sup>ら</sup>ば<sup>あ</sup>ち<sup>の</sup>お<sup>や</sup>お<sup>ゆ</sup>る<sup>に</sup>い<sup>ら</sup>ぬ<sup>か</sup>り<sup>し</sup>  
とてとりともあらはく<sup>ま</sup>ひ<sup>て</sup>大<sup>文</sup>の<sup>女</sup>侍<sup>の</sup>母<sup>と</sup>い<sup>は</sup>す<sup>け</sup>は<sup>さ</sup>く<sup>け</sup>は<sup>さ</sup>く<sup>け</sup>は<sup>さ</sup>く<sup>け</sup>  
ま<sup>つ</sup>り<sup>り</sup>つ<sup>ら</sup>き<sup>き</sup>女<sup>君</sup>丁<sup>へ</sup>こ<sup>こ</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>  
ととこ<sup>太</sup>孝<sup>保氏君</sup>は<sup>い</sup>さ<sup>さ</sup>その<sup>め</sup>の<sup>け</sup>あ<sup>き</sup>ほ<sup>と</sup>も<sup>も</sup>又<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>  
く<sup>い</sup>う<sup>あ</sup>る<sup>は</sup>あ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>  
より大<sup>文</sup>の<sup>女</sup>侍<sup>の</sup>母<sup>と</sup>い<sup>は</sup>す<sup>け</sup>は<sup>さ</sup>く<sup>け</sup>は<sup>さ</sup>く<sup>け</sup>は<sup>さ</sup>く<sup>け</sup>は<sup>さ</sup>く<sup>け</sup>  
お小<sup>十</sup>四<sup>日</sup>の<sup>女</sup>侍<sup>の</sup>母<sup>と</sup>い<sup>は</sup>す<sup>け</sup>は<sup>さ</sup>く<sup>け</sup>は<sup>さ</sup>く<sup>け</sup>は<sup>さ</sup>く<sup>け</sup>は<sup>さ</sup>く<sup>け</sup>  
後<sup>末</sup>保<sup>孝</sup><sup>保氏君</sup>廿九日七月七日夕尊君おゆり<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>  
て三束殿と稱り候まふ  
白<sup>文</sup>孝<sup>保氏君</sup>小<sup>十</sup>四<sup>日</sup>の<sup>女</sup>侍<sup>の</sup>母<sup>と</sup>い<sup>は</sup>す<sup>け</sup>は<sup>さ</sup>く<sup>け</sup>は<sup>さ</sup>く<sup>け</sup>は<sup>さ</sup>く<sup>け</sup>は<sup>さ</sup>く<sup>け</sup>  
おん三束殿<sup>保氏君</sup>とあま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>

後ひろく

按てお井の居りし名お徳よハてんは天とかくお舟一五ハとてお井  
小夕若君とまひしくお井の居りし名とてハてんは天とかくお舟一五ハとてお井  
てんは天とかくお舟一五ハとてお井  
ありてあり

賢忠右大臣小方

お高尚侍 かんの若  
母夕敷上三位中お女

お高若よは若田屋若よは乳母の夫の少部と果して流産  
あり十歳の時お部死して口を<sup>保中若</sup>おつう若よとて  
まうりけし三月肥後のおまの監ををりて肥前へ来り  
四月廿日の御に肥前よむらんとてまうりけし<sup>保中若</sup>おつう若よとて  
遠くへ来りしあり九条のまの御のまの御とてまうりけし<sup>保中若</sup>おつう若よとて  
八幡少部とて又お徳よまうりてまひ右邊の御とてまうりけし<sup>保中若</sup>おつう若よとて  
まうり右邊のおまの御とてお徳よまうりてまひ右邊の御とてまうりけし<sup>保中若</sup>おつう若よとて  
十月六日院よむらとてまうりてお徳よまうりてまひ右邊の御とてまうりけし<sup>保中若</sup>おつう若よとて

お小 <sup>口書</sup> 小ひろく <sup>口書</sup> 小ひろく <sup>口書</sup> 小ひろく <sup>口書</sup> 小ひろく

お高若 <sup>口書</sup> 二月十六日當若日父内府 <sup>大位</sup> 若よとてまうりけし

お高若 <sup>口書</sup> 秋内侍 <sup>口書</sup> 若よとてまうりけし

お高若 <sup>口書</sup> 若よとてまうりけし

お高若 <sup>口書</sup> 正月内 <sup>口書</sup> 若よとてまうりけし

お高若 <sup>口書</sup> 又三位小 <sup>口書</sup> 若よとてまうりけし

お高若 <sup>口書</sup> 若よとてまうりけし

お高若 <sup>口書</sup> 夏内侍 <sup>口書</sup> 若よとてまうりけし

お小

按てお高若よは保中若の御に意をさるるお徳よとてまうりけし  
とてお高若よは保中若の御に意をさるるお徳よとてまうりけし  
ありてあり

お高若

お高若の御





いふと奉りしる御小おんきか〜  
世らにわの〜  
此節君と日人の〜  
去るせり知れし〜

九傳の傳

後宰相

寄生書 廿五 八月十日白き紙に  
その〜日の条に〜  
後宰相と〜

按〜  
十條〜  
此節の〜

○二條右政大臣

兼菅院外祖父

桐葉書 源氏 君主 二右大臣と〜

柳書 九四 二右大臣と〜

明石書 九七 夏うせ申ふ

流布の系に〜  
桐葉書より〜

大納言

柳書 二〇 申又書

政の毎

柳書 九四 新源氏若雲林院二三日〜  
了中〜  
の政の毎〜

いふわいふをくーいふーいふのいふいふのいふいふのいふいふ  
大いふいふのいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

松本京殿女侍 朱薙院女侍

柿考よこ田 中女侍

弘徽殿太后

朱薙院の御母 一のこの女侍 右大臣の女侍 赤土の女侍 太后

桐壺まきに右大臣の女侍、又一のこの女侍、又弘徽殿まきよ

葵まきに今后と又の 松原氏若菜正一第二年のらに三后のまきよ

若菜まきに先ふらまきよいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

よら川はうがひまきまきよいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

あひまき  
月あれまき

松原若菜正一第二年のらに三后のまきよ  
桐壺まきに今后と又の 松原氏若菜正一第二年のらに三后のまきよ  
若菜まきに先ふらまきよいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

御父の仕方

花まきまきに又の 女侍のこの女侍のあひまきよ 松原氏若菜正一第二年のらに三后のまきよ

あひまきまきに又の 女侍のこの女侍のあひまきよ 松原氏若菜正一第二年のらに三后のまきよ

波仕を政大臣の仕方

この君 松本若菜正一第二年のらに三后のまきよ

相壺まきまきに右大臣の女侍、又一のこの女侍、又弘徽殿まきよ

波仕 又すくー後まきまきに又一のこの女侍、又弘徽殿まきよ

あひまきまきに又の 女侍のこの女侍のあひまきよ 松原氏若菜正一第二年のらに三后のまきよ

あひまき

花妻をにんじふ が又深

朧月夜の内侍のうら

六の君 沖画殿 かんりの君

花妻 源氏君 二十 二月廿五日南殿の橋乃宴あり 源氏君之夜  
弘徽殿の細殿よ思ひくゆくわくけ 君小逢物多し別ま  
まひて後思ひやうもふ物修の詞よふおしう一人乃  
きぬくふ 源氏君 源氏君の心身 ならまこそハ巧くめまてにわれ  
ぬハ五の君あらんうし さらのま乃少の方及中納のま  
ぬぬ口の君あく社うとまう中くそれらま  
ハ今うしこくかかきまはま 源氏君 源氏君  
人との 源氏君 心きくまをいそしめしうも巧くいふま  
葵妻 源氏君 十二 沖画殿とすや  
柳妻 源氏君 廿四 二月内侍のうらまはま弘徽殿よ位ふ

若菜上 源氏君 廿日 兼権院出のりの後活のまのおい  
まじ二条のまに位ふらん

若菜下 源氏君 廿七日 夏ゆらん

流布の系圖小二条の内侍くこしとてはゆきつて考入  
○ 柳花妻よ源氏君の逢物多し一 ぬむらん日長小あくかのまき  
とらうててありまを源氏君神をこく 例とてまのまぬまき  
も入月のおろりありぬまてまきまきまきまきまきまきまき  
朧月夜の内侍くこハ名附けるぬく ぬむ修の詞よ 朧月夜の内侍  
のうらまはま後の人乃  
秘する名あり

位お將

花妻 源氏君 二十 二月源氏君朧月夜の君よまきまひて好は申  
く 尋ねまねくして水の跡よ人を附てまきまひし 弘  
徽殿 兼権院 の心退むの心わくしや 一人の中に位のおね右  
中条とらん申又けしや 三月廿五日右大臣兼左大臣の宴志銘

ひ——日原氏君のりむに引く者のむ——  
 とりあふとわたり申ふ事よりいふはまの位のおね——  
折流布の系上と藤ノ入のおねよりいふはまの位のおね——  
 は使で——人へとられし漢ありけり——

右中身

花真事——  
折流布の系上と藤ノ入のおねよりいふはまの位のおね——  
 は使で——人へとられし漢ありけり——

按柳書より二条を在居の領小申お家の下へもいふはまの位のおね——  
 は中お家の領し——  
 考合は——

今上の止外社父

○右大信

明石書 保氏君 二八  
 二右大信とらふ也

折流布の系上と藤ノ入のおねよりいふはまの位のおね——  
 は使で——人へとられし漢ありけり——

誓恩大政大信

右大將 大信 右大信

好藤書 保氏君 三十九  
 二右大信とらふ也  
 藤書 保氏君 三十七  
 二右大信とらふ也  
 そい——けるおね——  
 とやん——おね——  
 水の方ハ葉のとりおね——  
 若葉上書 保氏君 四十四  
 二右大信とらふ也  
 門下書 保氏君 四十六  
 二右大信とらふ也  
 二つ——  
 竹川書——

折流布の系上と藤ノ入のおねよりいふはまの位のおね——  
 は使で——人へとられし漢ありけり——

後の左段は居あはれのうらさうして後の方と申す一と御月持のうら  
左段は居あはれしうらさうして後の方と申す一と御月持のうら  
○世思ふらやうなはまに右太師のさうりあひのうらさうして後の方と申す  
よさうしてあひのうらさうして後の方と申す一と御月持のうら  
くひけらうらさうして後の方と申す一と御月持のうら  
持りあひのうらさうして後の方と申す一と御月持のうら

兼香殿女侍

兼香院の女侍 今上の西母

明の女侍 源氏君 廿八 兼の女よりみ代院のここの右太師の西女兼  
香殿の女侍の西女男のここの今上うまれまゝのうらさうして  
いふといふけや  
若菜下 源氏君 廿六 右太師の西女よりみ代院のここの右太師の西女兼  
のまつらうらさうして後の方と申す一と御月持のうら  
つ多給をてうせまひしうれは後うらさうして後の方と申す  
とこのうらさうして後の方と申す一と御月持のうら

源仲女

柳 源氏君 廿四 源氏君の西女よりみ代院のここの右太師の西女兼  
兼の女よりみ代院のここの右太師の西女兼  
兼の女よりみ代院のここの右太師の西女兼  
兼の女よりみ代院のここの右太師の西女兼

美木柱上

美木院の女侍 今上の西母

梅 源氏君 三十七 兼の女よりみ代院のここの右太師の西女兼  
兼の女よりみ代院のここの右太師の西女兼  
兼の女よりみ代院のここの右太師の西女兼  
兼の女よりみ代院のここの右太師の西女兼

何れをまゐりしつゝ  
まひしつゝ  
いふ所の口指も二人のこそ  
て神仏のつて今の  
めりけり  
梅小まなね 梅小まなねの母 梅小まなねの父 梅小まなねの兄 梅小まなねの弟 梅小まなねの妹 梅小まなねの姉 梅小まなねの叔父 梅小まなねの叔母 梅小まなねの舅 梅小まなねの祖母 梅小まなねの曾祖父 梅小まなねの曾祖母 梅小まなねの曾孫 梅小まなねの曾孫女

菖中納言

母まね 母まね 母まね

梅根まね 三十七 冬の家に入り 男君を十あるに教よ

うつりしつゝ  
かみさき  
つれづれ  
たけよき

竹川まね 三十八 正月夕方君の昔君の許に  
菖中納言 三十九 秋の夕方君の許に  
秋の夕方君の許に  
秋の夕方君の許に  
秋の夕方君の許に  
秋の夕方君の許に  
秋の夕方君の許に

次席君

母まね 母まね

梅根まね 四十 秋の夕方君の許に

右之席君

母まね 母まね

梅根まね 四十一 秋の夕方君の許に

若菜まね 四十二 秋の夕方君の許に

衆ふりしつゝいふて是れをいふにせしむるに  
の君おききいすつぎとせしむる方うれしとのまじり  
大ねおききのからついでしたり此後せしむるやうに  
しやうにゆくゆくみ何れぞとせしむるにせしむる  
おしつゝ

若菜下四十七 正月末菫院のあすの試樂の事  
つゝ右のおいひ後おききのせしむるの君のいさとの  
さうの笛さうり一年十二月廿六日  
つゝ右のおいひ後おききのせしむる後

竹川五十六 正月末菫院のあすの試樂の事  
又りまのゆくり小菫君のせしむる  
おしつゝ

高うゝぬりをもむ若君のあけきさふ  
毎うて皆糸織なりとせしむるに  
それば既申せしむるに  
おつゝとあけきさふ

寄生口若三月末菫院のあすの試樂の事  
おつゝとあけきさふ

右大糸

口若 右中糸  
母をいふ

若菜上四十七 正月末菫院のあすの試樂の事  
おつゝとあけきさふ

おつゝとあけきさふ  
竹川五十六 正月末菫院のあすの試樂の事  
おつゝとあけきさふ

既申

竹川五十六 正月末菫院のあすの試樂の事  
おつゝとあけきさふ

竹川孝に侍従の君に中女家一孝の孫小政中侍中君

冷泉院の事

廿二男君の母  
母方三侍従君に

竹川孝廿五三月廿十八日一孝君冷泉院に  
ありし年四月廿五日生れし日に父孝君ありて又男  
と生まりし事

内侍のかゝ

申の君  
母方三侍従君に

竹川孝廿五夏母君のゆつろをえて内侍の君となりし事  
て内侍ありし中の君となりし事

按竹川孝廿五父内侍の君となりし事に父孝君ありて又男  
と生まりし事

○大臣

栞卷の事

六条の息事

申の君に

夕夜孝君小侍の君の母にありし事

栞卷孝君小侍の君の母にありし事

孝君小侍の君の母にありし事

不平八月十六日母の母孝君小侍の君の母にありし事

孝君小侍の君の母にありし事

孝君小侍の君の母にありし事

孝君

按られし孝君小侍の君の母にありし事

○父

流しりか

藤原殿女侍

相壺帝の女侍

花教里まきむつち 平文抄本

花教里の上

この名 花のほろこ 夏の日のくさくさの草

花教里まきむつち 源氏物語 井五 よりみれいけいんてんてんてん 相壺帝 のふたぢ  
 もおしを院くれまをひてのちわくをさうしやま  
 ちゆとらの 源氏物語 大お夜のほろこよもてかきかねてまてくま  
 ふく 藤原殿 はおくくしものこの名 花教里 うちくさくさ  
 ほろくわのまきまひ 又いふあひて小八院のま まあねとま  
 まれ 又いふあひて小八院のま まあねとま  
 松風 源氏物語 三十一 小つみの 二葉院 東の院つくりま 花教里 まきむつち

花教里まきむつちのたいごこのふとつけてまてくさくさ  
 まきむつちまきむつち おくさくさ

花教里まきむつちのたいごこのふとつけてまてくさくさ  
 まきむつちまきむつち おくさくさ

○大

若はふまきむつち

入道播磨守

えい道清の中ね



雲林院の律師

柳孝源氏君 九四 秋源氏君を律師と請ひ小室より小村の庄へ  
こまひうせらや律師ふまうてまうるを母は是等の事  
との律師のよりまうる坊して法文をよもまうるは  
そむりて二三日とありかりけりあるものむらりて

桐壺文家

源氏君の母 柳孝新  
母 桐壺孝ふりし母のこころより一人そま  
母 源氏君の母の年よりま

桐壺孝ふりし母のこころより一人そま  
柳孝新の母の年よりま  
桐壺孝ふりし母のこころより一人そま  
桐壺孝ふりし母のこころより一人そま  
桐壺孝ふりし母のこころより一人そま  
桐壺孝ふりし母のこころより一人そま

○父

惟しり

常陸文の女方

未摘花の母上

芳直孝ふりし母のこころより一人そま  
芳直孝ふりし母のこころより一人そま  
芳直孝ふりし母のこころより一人そま  
芳直孝ふりし母のこころより一人そま  
芳直孝ふりし母のこころより一人そま

大部の女方

右小の女

○た大臣

桂直孝にの女

女師

源氏院の女師 山名何しり

榎栞子 保氏君 三十九 正月男嶋の糸よれた大坂の女侍をうか  
らひまふ

○たむ

栞子にても

藤原殿女侍

三の君 友妻女侍 今上の廿二歳の侍世

栞子 保氏君 三十九 二月の糸にりふた大臣の三の君ありあひぬ

藤原殿とゆめゆめ

栞子の君今上の四之枝の侍ありあひぬれハ寄生きに入より先小あうひてよりハ  
文小あうひ且申ありのけハ藤原女侍と名つるこひたれハそれハ藤原殿とす  
後小あつる小あうひ  
あうひ

寄生き 廿二歳 又りあひぬれハ寄生きに入より先小あうひてよりハ  
文小あうひ且申ありのけハ藤原女侍と名つるこひたれハそれハ藤原殿とす  
後小あつる小あうひ  
あうひ

よあひあひけらまゝの  
小あうひあひぬれハ寄生きに入より先小あうひてよりハ  
文小あうひ且申ありのけハ藤原女侍と名つるこひたれハそれハ藤原殿とす  
後小あつる小あうひ  
あうひ

大さね

修理女史

寄生きに廿二歳の母方のよりりハ藤原殿と名つるこひたれハそれハ藤原殿とす

くさばらうらふらふのさうしつゝいふかきつゝふふ大層  
けいしつは候とてしつゝいふ  
二月廿余日某君廿二日に某所に某事あり三日の夜に某に  
某の事ありとて某の事ありとて某の事ありとて某の事ありとて  
けいしつは候とてしつゝいふ

○大層

楊姫まにるのやふ

宇治八家の小方

大層中某の四母

楊姫まにるのやふお方もいふの大層うらばらうらばらうら  
くさばらうらふらふのさうしつゝいふかきつゝふふ大層  
けいしつは候とてしつゝいふ  
二月廿余日某君廿二日に某所に某事あり三日の夜に某に  
某の事ありとて某の事ありとて某の事ありとて某の事ありとて  
けいしつは候とてしつゝいふ

父

常陸の介れ小方

は母君の四母中おの君

あねぬあつひははらうらふらふのさうしつゝいふかきつゝふふ大層  
けいしつは候とてしつゝいふ  
二月廿余日某君廿二日に某所に某事あり三日の夜に某に  
某の事ありとて某の事ありとて某の事ありとて某の事ありとて  
けいしつは候とてしつゝいふ

しうしうあはれさうまはかのいしうあ仲の君と  
てハの家に住ひて浮舟君をうしうのらうあめはうしう  
めてをふれさうま由山んくねハ陰奥の集あうてそ  
のふりう又常陸の介なうりたれいしうふらうら子殿  
うんういさう十五まう遠にのちるま

右中毎

権中まうしうしう

毎尾

毎の君 毎のありや  
母柏本君の乳母 権中まうしうの細末のいしう  
けいふあふんはうしう

楊姫まうしうしうあめ柏本君はは柏本君をうしうあ  
しうしうあふんあ母も病つきてうせぬやうて人うせま  
西の海のをてふりうしうあふんあふんあふんあふんあ

中まふりふふ人海らうの柳大綱をのらめれとてまうハ  
の字と姫君たちのそふ方の母方のとらね中毎とてうせふ  
けらう子なうらう年浪をうしうあふんあふんあふんあ  
うせまひてのらうの殿位あふんあふんあふんあふんあ  
とらてあうせまふんあふんあ毎の君とて年ハあふんあ  
たうぬうしうしうあ十五まうあふんあふんあふんあ  
しうしうあふんあふんあふんあふんあふんあふんあ  
甲巖まうしうしうあふんあふんあふんあふんあ

○竹川左大臣

竹川まうしうしうあふんあふんあふんあふんあ

按長云竹川の左大臣はうしうあふんあふんあふんあ  
たふんあふんあふんあふんあふんあふんあふんあ

二位申付の由方

竹川きふり（敬請の旨）申付ありしと二位の申付ありしはてそ  
りしと九右衛門の旨いすりとえしれしありしと申付ありしは

